I-30

横山公男の手掛けた一連の宗教施設に関する研究
―建築家の世界観と宗教建築をめぐって―
Research work about Kimio Yokoyama`s religious building
-Architect`s worldview and religious building -

○河住祥旗[1]　田所辰之助[2]
＊Yoshiki Kawasumi[1]　Sinnosuke tadokoro[2]

I will analyze Kimio Yokoyama's design idea and technique. I focus on Kimio Yokoyama who built a religious building as much as 252 works for life and inspect the design activity for the purpose of elucidating a problem how ideal existence like telling of a religion is embodied by construction.

Ⅰ．研究目的および方法

日蓮正宗信徒である横山公男が日蓮正宗の教義をその作品にどのように具現化させたのか、横山公男の設計理念及びその設計手法を分析する。宗教の教えのような観念的存在が建築にどのように空間化されるのかという問題を解明することを目的として、生涯 252 作品もの宗教施設を建てた横山公男に焦点を当ててその設計活動を検証する。横山公男は大石寺正本堂及び伽藍（1964 年日本建築学会受賞）の設計者として知られているが、それ以外に手掛けた 252 作品に及ぶ宗教施設の全容についてはこれまでほとんど言及されてこなかった。とくに晩年に集中している、まるで住宅であるかのようなスケールをもつ小寺院に着目し、横山がそのデザインの考え方を大きく変えた要因について考察していきたい。

Ⅱ．本論

Ⅱ－1．横山公男に略歴

横山は 1924 年に千葉県船橋市に生まれた。幼い頃から日蓮正宗の末寺である浄園寺で生活し、信仰と身近に接しながら、生涯を通して日蓮正宗の建築を設計し続けた。また、日達上人の娘と結婚するなど、横山公男が宗教建築を設計する際に、その根源にある考えは日蓮正宗のものであるといえる。

横山公男が建築に携わるようになったのは中学の頃からだ。早く技術を身につける必要があったことから、安田工業に入った。しかし、この頃は特に建築に興味があったわけではなく、中学二年で規矩術を学んだ際に興味が湧き、早稲田大学の専門部に入学した。卒業する際に明石信道の日泰文化会館のコンペを手伝ったときに建築の仕事のおもしろさを感じ、早稲田大学理工学部建築学科に進んだ。1948 年に大学を卒業して、松田平田設計事務所に入所するもわずか 6 年で退所した。同期の建築家と合作社設計室を設立し、翌年には連合設計社を改組する。連合設計社として多くの作品を残した。連合設計社では、ワンマンコントロールによる事務所形態に多くの疑問を持ち、理解しあえ各人の生活条件において同等に利害を分かち合える同志があつまり、同等な責任と義務と権利をもてる一つの組織の在り方が目指された。

Ⅱ－2．日蓮宗と日蓮正宗の違い

日蓮宗とは最澄の天台宗、空海の真言宗、浄土宗・臨済宗・浄土真宗・曹洞宗などのあらゆる経典を修めた日蓮が「法華経」こそが最高の経典である信じ、困難な世の中を救う唯一の道と考え作った宗教である。

もともとは同じ日蓮宗だったのだが 700 年前に日蓮聖人は後継者を 6 人選び、6 人（富士門流・比企谷門流・中山門流・身延門流・浜門流）がそれぞれの門派を作り出した。

Ⅱ－3．横山公男の作品の特徴や設計に対する姿勢

Ⅱ－3－１.作品の特徴

１：日大理工・学部生・建築　２：日大理工・教員・建築

横山公男の設計にはいくつかの特徴がある。丸みのある天井の表現と窓や入口に半円アーチのデザインが多い。信者が出入り口で混雑しないように回遊性を意識した平面設計がなされている。これらの特徴は様々な宗教建築に応用されている。横山は伝統的社寺建築の様式にみられる技術や表現は認めながらも、宗教建築を設計する際に建築形態を模倣するといった設計態度を批判している。

Ⅱ－3－2．横山公男の根源にあるもの

そんな横山も晩年は外観よりも室内の空間を重視したまるで住宅のような宗教施設設計を行っていた。それは、室内を包み込むような空間である。横山は、ロマネスクをはじめとする西洋の建築様式や思想について興味があった。その中でも 11 世紀から 12 世紀後半にかけてのクリュニー会修道院とシトー会修道院の活発な建築活動がある。華麗なクリュニー会修道院と簡素なシトー会修道院の建築上の違いに関心を寄せ、豪華に飾ると費用をかけ続けることになり、人々の祈る心をそらせてしまうというベルナールの見解に、当時の日本社会がものを買い集めお金を惜しみなく使う物質主義社会であったという背景を重ね合わせていた。横山は宗教と社会の関係が薄くなるにつれて、神と人との関係も疎遠になると考えている。横山が理想とした宗教建築は中世ヨーロッパのような生活と信仰が密接に相互に関連するような状況で成立するものであったことが分かる。

Ⅱ－3－3．横山公男の晩年の作品について

横山公男の晩年の作品に、住宅のような室内空間を重視した西山本門寺がある。これは「由緒ある寺院で杉、銀杏の大木に囲まれた静かな佇まいの中、鐘楼、客殿に隣接して建てられている。連続感のあるシンメトリーの構成をとっているが、荘厳さの中にも親しみを感じさせる宗教建築となっていて、コンクリート打放しの壁と開口部の木製の戸扉とのコントラストに妙味があり、木製の戸扉は固いコンクリートの肌に柔らかさを与え、この建築に親しみやすいものとしている。」(1) と評価されている。紫金山慈光寺については、「横山は多くの寺院を建てているがそのほとんど鉄筋コンクリート造が多い。しかしこの寺院は木造となっている。この寺院の最大の特徴は周辺の環境と調和させたところにある。平面構成は本堂部分と住居部分とに大別されるが、その構成方法は古い日本建築にみられる自然との同化を試みる手法となっている。」(2)　と語られている。このように大石寺は富士山を背景に外見を重視する建築となっていた。しかし、大石寺正本堂を境に西山本門寺や紫金山慈光寺のように周囲の自然と調和するようなスケールで内観も室内のような空間の創造をし始めた。

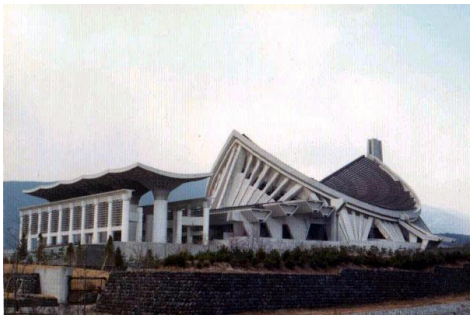

図 1：大石寺正本堂

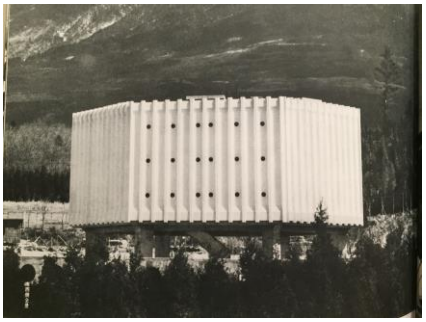

図 2：大石寺納骨堂

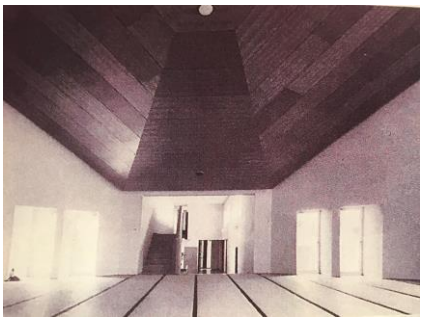

図 3：西山本門寺

Ⅲ．おわりに

横山公男は幼い頃から宗教信徒でありながら日蓮正宗の教義だけに染まらず、社寺建築の様式にみられる技術や表現は認めながらも、その建築形態を模倣するといった、創造を怠った設計態度を批判している。そして、機能的で合理的な設計を出発点としながら、人間の内側の感情的な部分から設計を行うことを重視し、生活のなかに生きる宗教のなかに建築創造の源泉を見出していた。

Ⅳ．参考文献

１．沼久内麻由　「横山公男の「宗教」をとりまく創造活動―建築家・横山公男の建築研究―」　大阪市立大学大学院　修士論文　2015 年／２　栗田勇　『現代建築家全集 20』　三一書房、1972 年ｐｐ.81-84／３．横山公男　「根源にあるもの」　『現代建築家全集 20』三一書房、1972 年／４．横山公男の仕事歴　『建築』　1960 年　11 月号／５．連合設計社発足にあたって　武井研造　『建築文化』1957 年　11 月臨時増刊号／６．大石寺の伽藍　伊藤ていじ　『国際建築』　1966 年 10 月号／７．大石寺の設計について　『建築文化』1958 年 8 月号／８．大石寺大客殿の構造設計　『建築文化』1964 年 5 月号／9. 大石寺大客殿　『建築』1964 年 5 月号／10. 藤井正雄　『うちのお寺は日蓮宗』　双葉社　1997 年
図 1.2.3　栗田勇　『現代建築家全集 20』　三一書房、1972 年／注釈（1）（2）栗田勇　『現代建築家全集 20』　三一書房、1972 年ｐｐ65.70